

Title	ヨーゼフ・ A・ シュンペーター : 革新の経済学
Sub Title	Joseph A. Schumpeter : The economics of innovation
Author	福岡, 正夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1950
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.43, No.1 (1950. 7) ,p.3- 23
JaLC DOI	10.14991/001.19500701-0003
Abstract	
Notes	特集・ 経済学者と世界像 = Economists and their "Weltbild" 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19500701-0003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

固より本誌の如く、敢えて時流に阿るが如きことをせず、又必ずしも質的水準を下げてまでもその通俗化を圖らうとはせず、全く各部門の研究者をしてその自ら企畫するまゝに研究を推進せしめ、その結果を發表せしめる場合には、市中一般の雑誌と同様の流布を求め得ないことは、吾々のよく承知するところである。

それにも拘らず、茲に復刊第一號を世に送り得るに至つたのは、全く慶應義塾内外からの絶大な支援の賜物であつて、吾々關係者の衷心より感佩措くところを知らぬ次第である。

惟ふに、同じく文科系の研究といつても、經濟學一般のその如きは、時代を全く離れ、たゞ超然たるを以つて足るわけでないことは明かである。それ故に、本誌の傳統はどこまでも生かして行きながらも、出来る限り編輯の方針に新味を加へることは努めるつもりである。常に時代に一步を先んずる考への下に、各部門の研究者が自由に研學し、その成果を自由に公表し得る本誌の如きが存在するといふことは、學問の進歩及び社會の發展のために、必ず寄與するところがあると、確信するのである。學問研究に深い理解と同情をもたれる大方の、今後に於ける一段の援助を懇請して止まない次第である。

尙ほ、慶應義塾大學名譽教授高橋誠一郎先生は、特に本誌のために題字を揮毫せられた。先生が本誌に對して引き続き寄せられる御厚意に對し、茲に誌して深謝の意を表する次第である。

一九五〇年五月二〇日

金原賢之助

ヨーゼフ・A・シュンペーター

—革新の經濟學—

福岡正夫

なんと云つても經濟學者としてのシュンペーターの眞價は、企業の新機軸論を中心とした發展の理論の創始者であることの中に見出すべきである。

都留重人『アメリカ經濟學の旅』より

プロローグ

これはいわゆる評傳ではない。早くはその不羈の傑作『學說史』^(註1)に於いて、或ひはまた折にふれて書き綴られた幾人かの經濟學者の評論、オピチュアリー^(註2)のたぐひに於いて、自らこよなき評傳家としての手練を世に示したシュンペーター教授そのひとに、いま改めて恰好な敘傳を、といふのであれば、それはあたかもマリーシャルを敘するにかのケ

ヨーゼフ・A・シュンペーター

インズ卿を『傳記小論集』の『マインツェル敍傳』、ケインズを敍するに當るのシュンペーター教授を『新しき經濟學』のケインズ敍傳』といふての圓熟の巨匠に俟たねばならぬことがらであるに違ひない。さうではなく、さしあたり此處では、教授の急逝を契機として改めてわたくしがシュンペーター的世界から読みとり得たまゝを、全くスケッチ風に書きとめておかうといふのである。

一八八三年といへば、あの大マルクスが他界した年であるとともにメイナード・ケインズが誕生した年でもあるが、この同じ年にシュンペーター教授はチェッコスロヴァキアのトリーンに生を享けた。相ともに資本主義といふ宿命的な社會の種々相を直視し、その發展・沈滞・崩壊を説いたこの三人の巨星がひとつ年に現れ且つ消えたといふ象徴的な事實は彼等の人とたなりを語るひとびとに好んで用ひられる裝飾樂句であるが、しかもこの同年生れの二人の學者がもう一人の先輩に捧げた評價は著しく異なるものであつた。「魚よりも泥を好み、野卑なプロレタリアートを、あらゆる缺點にもかゝはらず人生の徳であり確かにあらゆる人種の進歩の種子を運ぶブルジョワとインテリゲンチヤの上位にのせるやうな信條を、どうしてわたしが採用出来やうか。」^(註3)といふ一言の下にマルクシズムを却け、『資本論』の内容にも手を觸れることを潔しとしなかつたケインズのアングロ・サクソンの態度にひきかへて、シュンペーター教授のマルクスへの肉薄が實になみ／＼ならぬ纏裏にまで透徹したものであつたことは、今日われ／＼が教授のマルクス論^(註5)に窺ひ知ることの出来るとほりである。そのみではない。或る意味では、教授の學說そのものが或ひはその考へ方に於いて或ひはその結論に於いてマルクスのそれに著しく接近した。試みに一、二の敍述を引用しておかう。

「經濟的社會的なことがらはそれ自身のモメンタムによつて運動する。そして、その結果生じてくる事態は個人や集團をして、彼等のなさんと望むところが何であるにせよ、ある特定の方向に行動させる。——實にそれは彼等の選擇の自由を破壊するといふことによつてではなく、それらの選擇を行ふ精神状態そのものを形づくり、選擇の對象となる可能性のリストの範圍を限定するといふことによつてなのである。もしこれがマルクシズムの眞髓であるといふのであれば、われ／＼は誰もがマルクシストにならねばならぬ。」^(註6)

「資本主義の過程は單にそれ自らの制度的な枠を破壊するのみならず、また次に來るべき枠のための條件をも創造する。……その過程の歸結はいかなるものが現れてきても充つことの出来る眞空状態ではなく、事物も精神もますます社會主義的な生産様式に従ひ易いやうに變容されてゆくといふことである。資本主義といふ構造物の下から釘が一本一本抜かれてゆくに於いて、社會主義計畫の不可能性はますます消え失せてゆく。その何れながらの點に於いて、マルクスの洞察は正しかつたのである。」^(註7)

まさにこの結論に至つては、その類似はクライマックスに達したかの感があらう。しかし、類似はあくまで類似に終はる。たとひこの映像がマルクスのそれにどれだけ近づかうとも、マルクスがこの洞察を合理化した分析の過程は、教授に依れば、救ひ難く誤つたものであつたのである。——勞働價值説は既に「死んで埋葬すみ」の體系である、産業豫備軍の理論はそれのみで決して正しくはあり得ないリカードの機械論が「釣針から糸から重りまで」吞込まれたうえその一方的解釋によつてのみ成立つものである等々——では、シュンペーター教授自らの論理から資本主義はどうして自滅の途を辿るのであらうか。最後の書に繰りひろげられたこの魅惑的な問題を二應後に託しながら、われ／＼はまづ教授の最初の書から出發せねばならぬ。

- (註1) J. A. Schumpeter, *Epochen der Dogmen- und Methodengeschichte*, 1914.
- (註2) 例へばクラーク、ワルラス、メンガー、エッヂワース、シュモラー、クナップ、ヴィンセル、カッセル、ゾンバルト、ウィザール、ボエーム、ヤンク、タウシツグ、マイシヤル、マルクス、ケインズ、フィッシャー、ブレード、ミンチェル等。
- (註3) J. M. Keynes, *Essays in Persuasion*, 1933, p. 300.
- (註4) 何よりもシュンペーター教授の評言を摘記しておく。「藝術趣味のあるものを除けば、彼「ケインズ」は驚くほど島國的であり、哲學に於てすらさうであつたが、經濟學に於いてそれは最も甚しかった。」*The New Economics*, edited by S. E. Harris, 1947, p. 85. [邦譯「日本銀行調査局『新しい經濟學』」一三三頁]。
- (註5) J. A. Schumpeter, *Capitalism, Socialism and Democracy*, 1942, revised edition 1947, Part I, ditto, "The Communist Manifesto" in *Sociology and Economics*, *The Journal of Political Economy*, June, 1949.
- (註6) Schumpeter, *Capitalism, Socialism and Democracy*, pp. 129-130.
- (註7) Schumpeter: *op. cit.*, p. 162.

經濟學者としてのシュンペーター教授のスタートは(二、三の論文を別とすれば)まづ處女作『理論經濟學の本質と主要内容』^(註1)に始まつた。メンガー、ボエームとりわけウィザールを父としレオン・ワルラスを母として生み出されたこの書物は、いわゆる純粹經濟學の方法論的深化といふ寄與によつて我が國に於いても夙に高名である。與件の固定化といふ操作を通じての經濟的函數關係の特定化、さうしてこのやうなセッティングの枠内に於いて何處に均衡價格が決定されるかといふことの記述にこそ經濟理論の第一の課題があるといふ周知の論についてはわれわれはこゝに多

くを語るを要しないであらう。Erklärungから Beschreibungへ、發生論的價格理論から函數論的價格理論へ、といふアクセントの推移を明示している本書は、まさにウィーンの學園へのローザンヌ的思惟の滲透を力強く物語るものであつたのである。

しかしながら、純粹經濟學即一般均衡理論即ローザンヌ學派といふ常套の連鎖にゆだねられるより以上に、本書の中には父系の血がかなり色濃く流れているやうに思はれる。まづ何よりも本書に於ける教授の青寫眞は限界效用均等の法則に立脚する消費者の均衡と交換の一般均衡とを中心として構成された。一般均衡の世界のもう一つの半球——限界生産力説を基軸とする生産者の均衡ならびに生産の一般均衡へと指向するワルラスの途を進む代りに、本書はかの消費財の價值函數から生産要素の價值函數を導く歸屬の理論を與へるに止まつた。勿論われわれは教授の歸屬理論と師ボエームのそれとの重要な相違を無視しやうとは思はない。のみならず、教授自らが、そののち價值歸屬から價格歸屬へといふ轉換コースを歩むことによつて當の限界生産力説の判然たる擔ひ手となつたひとであつた。さうして、更に最近のバレット評傳に現れた教授についてみるかぎり、それはもはや文献涉獵の旅を終へてこの理論の全き系譜と意義とを知りつくしたシュンペーター教授ではある。^(註3)しかし、このやうにひとたび知り得たのちはそれを支持するに吝かでなかつた教授であつてみれば、かへつてその開放性の故にこそ、われわれは次のやうに言ひ得るのではなからうか。少くとも二十五才の教授は當時既にワルラスの『要論』中に收められていた限界生産力説の意義を悟られるには未だあまりにオーストリア的であつたのである、と。

哲學解脫といふ教授の淨化作業を『經濟科學の性質と意義』(一九三二年)に於けるライオネル・ロビンズのポジティヴィズムに准へることが出来るかどうかはさて置き、次のやうな教授の敘述を本書から引用しておくことは

興味深い。

「精密經濟學は人間の經濟行爲の哲學ではない。況んやそれは人間行爲一般の哲學ではない。それにもかゝらず、ひとは屢々そのやうに主張し、人間行爲が經濟的動機から残る限なく解明されると述べている。いま、われ々がとりわけ力説したいことは、このことが正しいとか正しくないとかいふ判断ではなく、純粹經濟學の對象たる事實群にとつてはそれが一般にかゝりないといふことなのであり、純粹經濟學はそれに依存せず、それについては何事も發言し得ぬといふことなのである。」^(註4)

さらにこの點に關聯して次の二つのことがらが注意されるべきであらう。^(註5) 第一に教授は自由競争といふ言葉からそれに附隨する倫理的意味を全く剝奪した。望ましき状態としての自由競争の讚美からレッセ・フエアやレッセ・パッセの指令へと導く古典學派の哲學は、教授によつて經濟學の領域からすべて峻嚴に追放された。第二に、これと密接に關聯しながら、教授は極大原理にまつはる厚生經濟學的内包を一掃し、完全競争が各個人の満足を極大ならしめるが故に社會の總厚生を極大ならしめるといふ主張を正面から否定した。このことは英國經濟學者に對比しての教授のミゼス、ロビンズへの近縁性を示すものであると同時に、他方或る意味ではワルラスからの一歩の乖離を示すものであらう。何故なら、周知のやうにワルラスは競争即最適の命題を支持したからである。このワルラスの見解に對する近時の批判(例へばサムエルソンのそれを見よ)^(註6) は既にそのまゝ本書の中に見出すことが出来る。正規の極大條件がパラメーターとしての財貨の保有量と市場状況とに相對的な個人の地位を確定するに過ぎず、^(註7) 未だそのみでは決して社會的な最適を示すものではないと強調した貢獻に於いて、本書の教授はクヌート・ヴィクセルとまさに同列に立つのである。

『本質』の主要部分は不變條件に對應する均衡値の確定状況を取扱ふいはゆる「靜學」(Static)に捧げられた。更に、教授に依れば、條件を構成する因子の一つが無限小變化をなす場合、次に成立すべき均衡値が以前のそれに比してどう異なるかに解答を用意することは、すぐれて「靜學」の方法を以て取扱はれるべき問題であり、教授はこれをエンリコ・バローネの示唆に従つて「變化法」と命名したが、この問題領域がいはゆる「比較靜學」(Komparativ Static)に相當するものであることは明らかである。かくして、本書に於いては、條件群が in the large の、といふよりはむしろ飛躍的な、變化をなす場合に於ける問題の取扱ひのみが「動學」(Dynamic)といふ便宜的なレッテルの下にとりのこされ、後の分析にゆだねられることゝなつたのである。この點に關する説明は次節に譲ることゝし、ここでは「靜學」「動學」の二分法についての教授の見解の成長のみを顧みて舞臺轉換のインテルメツォとしやう。

本書が刊行されてから次作への構想が熟してくるにつれて、教授は「靜學」「動學」といふレッテルが自らの意圖を完全に表はす所以ではないことを次第に痛感した。かくして第二の書『經濟發展の理論』に於いて、それらは遂に「循環」(Kreislauf)と「發展」(Entwicklung)とを構想にとつて代られた。「循環」とは經濟が毎期同一の型の運動を繰返へす状態を示す言葉であり、それはもはや「定常状態」(Stationäre Zustand)と呼ばれるにふさはしいシーンを示している。もし何らかの條件の變化があれば、勿論新しい條件に向つての適應が行はれるであらう。しかし、二分法に對する教授の力點が奈邊に置かれるかは、こゝではいまや極めて明瞭である。問題の領域を鋭く二分するものは、條件が一定であるか變化するかといふやうな點にあるのではなく、むしろそれに対する主體の反應のタイプにある。一定の條件であれ變化した條件であれすべてそれを外から與へられたものとしてそれに適應する主體の行動を取扱ふ問題領域が一つ、それとは劇的な對比を示しつつ、内から條件を急激に變革してゆく主體の行動を取扱ふ問

題領域が一つ。さうして「發展」とはまさにこの後者の現象にこそ投けらるべき名稱であるのである。「發展の理論」が版を重ねている間、ラグナフ・フリッシュを代表者とする一群の数理經濟學者たちは經濟分析に於ける時間因子の取扱ひを境界線として「靜學」「動學」の分析的定義をエラボレイトするところがあつたが、これと教授の「循環」「發展」とは一應嚴に識別されるべきものであり、「靜態」「動態」といふやうな言葉の水路を通じて映像 (vision) にかゝる教授の區分をそのまま用具 (apparatus) としての「靜學」「動學」に解消させず態度は、最近の經濟理論の成果たる「靜學」「動學」の意味づけを正確に理解し得てをらぬのみならず、同時にシュンペーター經濟學の特質をも滅却するものと言はねばならぬ。何よりも教授自らの言がこの點を明らかにするであらう。

「わたしはこの二つの構成」「循環」と「發展」といふ構成」の代りに最初は「靜學」「動學」といふ術語を用ひたが、いまは (フリッシュ教授に従つて) このやうな意味でこれらを用ひることを斷然止めている。……しかしこの「循環」と「發展」といふ、或ひは受動的「適應」と能動的「革新」といふ區別がわたしの現在の仕事に於いて役立つことを繰返して知つたが故に、依然としてこの區別を維持するものである。……既にある會社を經營するに伴ふ現象と新しい會社を創設するに伴ふ現象とを分離することは果して現實に對して不忠實であり人工的であらうか。」^(註8)

「『靜學』ならびに『定常状態』といふ二つのものは混同されてはならぬ。靜學理論は單に均衡の條件および小攪亂の後に於ける均衡復歸の仕方に関する敘述に過ぎない。かかる理論は現實がいかに不均衡にあらうともその研究に役立つを得る。しかるに一方、定常過程は現實にそれ自ら變化する要因を含まず、單に實質所得の恒常率を再現するところの過程である。」^(註9)

「動學理論の限定的特質はそれが適用される經濟的現實の性質とは何らの關係もない。それは特定な過程を研究するものではなく、むしろ一般的な分析の方法を提供するものである。われわれは定常經濟を分析するためにも動學の方法を用ひることが出来るが、それは恰も發展的な經濟が靜學の方法を用ひて分析され得る (比較靜學) のと同然である。」^(註10)

『本質』の公刊より今日に至るまで約四十年、その間經濟理論の tool box は無差別曲線、代用の弾力性、不完全競争、キンク、豫想の方法、遅れをもつた變數、等々數へあげれば際限のない種々のイノヴェイションによつてますます豊富にされていつた。シュンペーター教授が本書が満足せず、より一層現代的な經濟理論の基本書を企圖してをられたことは、折にふれて洩らされた教授の言葉からも察せられる。

「わたしが現代の理論的成果に少しでも寄與し得るものは別の形で言ふことにしたいと思ふ。……とりわけ『本質と主要内容』の第二版に當るべき『經濟學の理論的用具』(Theoretischen Apparat der Ökonomie) に關する一書に於て。」^(註11)

しかしながら、残念なことにシュンペーター教授自らのこの『經濟分析の基礎』は、絶えず教授の腦裏を去來しながらも、遂にトルソに終つたのである。

(註1) J. A. Schumpeter. Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie, 1908. [邦譯] 木村

ヨーゼフ・A・シュンペーター

健康・安井球磨譯『理論經濟學の本質と主要内容』一九三六年

- (註3) この註文の5つは教授S.の論文 Das Grundprinzip der Verteilungstheorie, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 42, 1916, 4-15 Zur Frage der Grenzproduktivität, Schmollers Jahrbuch, 51. Jarg. 5 Ht. 1927. 参照。

- (註4) J. A. Schumpeter, Vilfredo Pareto (1848-1923), Quarterly Journal of Economics, May, 1949, pp. 165-166.
 (註5) Schumpeter, Wesen, S. 77. [邦譯「七三頁」]
 (註6) Schumpeter, Wesen SS. 192-212. [邦譯「一八〇—一九九頁」]
 (註7) P. A. Samuelson, Foundations of Economic Analysis, 1947, pp. 204-205.
 (註8) K. Wicksell, Lectures on Political Economy, [translated by E. Classen] 1934, vol. I, pp. 72-83.
 (註9) 『發展の理論』英譯版(一九三四年)の序文「一一頁」。
 (註10) 『發展の理論』日本譯版(一九三七年)の序文「三二頁」。
 (註11) Capitalism, Socialism and Democracy, p. 104, n. 24.
 (註12) 『發展の理論』第四版(一九三五年)の序文「二〇頁」。

奈翁の名を衆に擢んでしめる第一歩があつたといふことは、^(註1)「經濟發展の理論」こそシュンペーター教授に於けるツローンたるべきものである。けだし、その成否の如何を問はず、教授の爾後の大作の基礎は殆どこの書の中に胚胎してをつたのであり、その意味に於いては、本書は教授の學の生涯の航路を決定的に方向づけたと

言ひ得るからである。このことがわれわれに少しく此處で停止する理由を與へるであらう。

本書に現れたシュンペーター經濟學の核ともいふべき映像は、簡単に言へば、次の如きものである。經濟といふ生命體には、定常的な「循環」や外的攪亂への不斷の「適應」といふ現象の他に、なほそれらを以てしては到底把え得ぬ根本現象が存する。それは内から循環の軌道そのものを急激に(ruckweise)革新してゆく「發展」の現象に他ならず、さうして企業家の新機軸こそがまさにかかる發展の起動力たるものである。

發展とは、まづ何よりも創造的な現象であり、順應的な現象ではない。「諸君の周圍を見給へ、さうすれば諸君は事物がいかにさうであるかを見るであらう。」と教授は語つたが、事實、例へば電燈、自動車、飛行機、ラジオ、チユウインガム等々、われわれが日常接するものを手あたり次第數へあげてみただけでも、その存在の説明を嗜好變化に對する生産者の適應にではなく、企業家による需要函數そのものゝ創造にこそ負はねばならぬ現象が何と多いことであらうか。「經濟に於ける革新は、新欲望がまづ消費者の間に自發的に現れその壓力に基いて生産設備の方向が變へられるといふ風に行はれるのではなく、……むしろ新欲望が生産の側から消費者に教へ込まれ従つてイニシアティブは生産の側にあるといふ風に行はれるのをつねとする。これが慣行の軌道に於ける循環の完了と新事態の成立との間の相違の一つである。」^(註2)次に、それは飛躍的な現象であつて、連続的な現象ではない。「驛遞馬車をどれだけ連續的に加へても決して鐵道を得ることは出來ない。」^(註3)鋤からトラクターへ、水車から電力へ、革新は古いカーヴの近傍に於ける微分的歩調の散歩を以てしては達し得るものではなく、まさに古いカーヴから新しいカーヴへのジャンプによつてのみ形容さるべきものと言はねばならぬのである。

企業家とは、かゝる新結合(Neue Kombination)もしくは新機軸(Innovation)の遂行者にして始めて授けらるべ

き稱號である。定常經濟に於ける企業家、ワラスのいわゆる「利得も損失もしない企業家」(entrepreneur faisant ni bénéfice ni perte)とは、その意味に於いて、單に一箇の名辭矛盾でしかあり得ない。企業家は隅々まで分つてゐる循環の中を潮流と共に泳ぐ經濟主體のタイプではなく、かつて試みられぬ未知の海域を潮流に逆つて泳ぐタイプに屬している。さうして新しい消費財の創造、新しい生産方法の導入、新しい市場の開拓、新しい原料資源の占據、新しい組織形態の形成、等々によつてのみ、彼は活動の糧を提供されるのである。

さて、かゝる企業家職能は必ずしも資本主義社會に固有なものではない。それが社會主義社會にも或ひは原始社會にさへ存在するといふことは教授自らが何回か明言しているところでもある。しかし、それにもかゝらず、何といつても教授の一生を通じての學の焦點は、この企業家活動が資本主義といふ特定の制度の *Differentia specifica* の下に生み出してゆく運動の分析におかれていた。「資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析」——三十年に亘る努力を浩瀚千頁にこめた教授の最大傑作『景氣循環論』^(註4)の此の副題こそ何よりも雄辯にこのことを物語るものであらう。だが、教授のいふ企業家活動の「資本主義的」形態とは、一體何を指すのであらうか。いま、この點の理解に資する敘述を少しく探り出してみよう。一般に資本主義を特徴づける契機は、と問はれてまづ誰しもの心に浮ぶ答、物的生産手段の私的所有といふことに對して、第二に教授があげているのは、それが私的利潤の追及を旨指して機能するといふ點である。本來、資本主義といふ制度は徹頭徹尾經濟的な鑄型に填め込まれて創られている。そこでは賞も罰もすべてが貨幣のタムを以て計算され、昇進と零落とは直ちに儲けることゝ失ふことゝを意味している。それが與へる沈淪への脅威はそこでは容赦せぬ敏速さを以て結果する一方、それが抱かしめる富への期待は多數の非凡な頭腦を魅惑するに充分な效力を發揮する。この成功を僥倖する可能性が能力に精力に企業家に呼びかけ、かくして成功し

た少数者に彼等の努力を誘ふに要するより以上の賞金が利潤が授けられる。この利潤こそ、資本主義社會に於いては、企業家の成功の指標となり、勝利の記念柱となり、かつ不斷の變轉を通じて伸長するこの社會の動輪となるところのものである。しかしながら(注目に値することだが)シュンペーター教授に依れば、私的財産と私的利潤といふ契機は未だ資本主義の特質を表現し盡すものではない。それらはいはば必要條件ではあるかも知れぬが決してそれのみで充分條件たるものではない。眞に重要なことは、これらの條件の下で企業家の新機軸がいかなる形でかついかなる現象を伴ひつゝ遂行されるかといふ點にあるのであり、それを特徴づける第三の契機信用創出のメカニズムこそ言葉の眞の意味に於ける資本主義の *Differentia specifica* である、といふのである。「如何なる資本主義の概念も、この第三のものによつて包括される一連の典型的な資本主義的現象を含まずしては決して満足ではあり得ない。」さうして、こゝに信用創出の生み出すティピカルな資本主義的現象といふのが教授に於いてはとりもなほさず景氣循環といふあの特徴的な現象に他ならなかつた。

「景氣循環の分析を行ふことは資本主義時代の經濟過程を分析することに等しく、それ以上でも以下でもない。…景氣循環こそ、扁桃腺のやうにそれだけを切り離して取扱ひ得るものではなく、心臓の鼓動のやうにそれが宿つてゐる有機體のエッセンスである。」^(註7)『景氣循環論』の劈頭にはこのやうに記されている。企業家の集中的出現、^(註8)「Das Neue tritt neben das Alte」現象、^(註9)「景氣循環論」の劈頭にはこのやうに記されている。企業家の集中的出現、^(註10)「景氣循環の說明」一九三一年經濟學論集所載「景氣循環の理論」の二論文を中間項とし「景氣循環論」に至つても體系化された)こゝで立入るにはあまりに老大な構築物であり、その検討は別の機會に割愛されねばならないが、

よしそれらに立入らずとも、右の引用はさしあたりわれわれに次の含意を明らかにするに足りるであらう。——資本主義を取扱ふことは、不可避的に景気循環と結びついた變動のプロセスを取扱ふことではなければならぬ。好況と不況、喜びと悲しみの交代するこのシュトルム・ウント・ドウランクの過程、いわゆる創造的破壊(Creative Destruction)の過程を通じてのみ、資本主義は自らのエンヂンを活動せしめることが出来る。

「資本主義は本質的に経済的變化の様式であり方法であるのであつて、決して定常的ではないのみならず、本来定常的たり得ぬところのものである。」^(註11)

「定常的な封建主義経済はなほ封建主義経済であり得やうし、定常的な社会主義経済もなほ社会主義経済であり得やう。しかし、定常的な資本主義経済といふのは言葉の矛盾に過ぎないのである。」^(註12)

(註1) J. A. Schumpeter, Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung, 1912. [邦訳、中山伊知郎・東畑精一譯『経済發展の理論』一九三七年]

(註2) Schumpeter, op. cit., S. 100. [邦訳、一六五頁]

(註3) J. A. Schumpeter, The Theory of Economic Development, English Edition [translated by R. Opie] 1934, p. 64. n. 1.

(註4) J. A. Schumpeter, Business Cycles, A Theoretical, Historical, and Statistical Analysis of the Capitalist Process, 1939.

(註5) Schumpeter, op. cit., p. 108. p. 223.

(註6) J. A. Schumpeter, Capitalism in the Postwar World, Postwar Economic Problems, edited by S. E. Harris,

1943, p. 113.

(註7) Schumpeter, Business Cycles, Preface, p. v.

(註8) 企業家の新機軸は「束なぐり」(In bunch)「波なぐり」(In waves)或は「群なぐり」(In clusters)現
在也。

(註9) Schumpeter, Entwicklung, S. 336.

(註10) 要素使用的な懷妊期間 (a factor-using period of "gestation")が景気上昇に對應し、産出増加的な運轉期間 (an output-increasing period of "operation")が景気後退に對應する。これらの用語についてはラング參照。Oscar Lange, Price Flexibility and Employment, 1944, p. 74.

(註11) Schumpeter, Capitalism, Socialism and Democracy, p. 82.

(註12) Schumpeter, Capitalism in the Postwar World, p. 117.

III

このやうに、絶えざる革新を通じてのみ進展する資本主義はやがて自らの中から自らを崩壊せしめる要因を生み出さねばならぬ。

エコノミック・ジャーナル誌一九二八年九月號の卷頭を飾つた一論文「資本主義の不安定性」^(註1)に於いて先觸れされ、かつ『景気循環論』後半の鬱蒼たる史實の分析のうちに姿を點滅していた教授のヴィジョンは、年來の社會學的造詣を經緯として、遂に最後の作品『資本主義・社會主義・民主主義』^(註2)の中に、かゝる命題を織り出すに至つた(第二篇「資本主義は生残り得るか」。マルクス論を先立て、社會主義の機能、社會主義と民主主義との關聯、社會主義政黨

史等々の廣汎多彩な論議を後に隨へる本書全體の構成からいへば、本篇の占める地位は勿論一小部分たるに過ぎぬが、資本主義についての映像を加味して、といふ本號の編集方針には此の命題の取扱ひが最もふさはしいと考へられるから、以下残り少い紙面を利用してその梗概を辿り、讀者への約を果すと共に、それを以てわれわれのシュンペーター論を閉じること致したい。

資本主義の機能の遂行にペンミスティックな見透しを與へるため通常支持されている見解は、おほむね次の三つのグループに分たれる、とシュンペーター教授は言つている。その第一は資本主義のエンジンそのものにかゝはるところのものであり、資本主義の高度化とともに自生する大規模企業がかつての完全競争の黄金時代を屏息し、獨占を蔓延せしめ、それが産出量の制限、價格の硬直性、投下資本の價值保存等々の動脈硬化的症狀いわゆる資本主義の化石的形態を生み、ひいては資本主義の機能を麻痺させる、といふ見解から成立つものである。第二は資本主義のエンジンが止まらぬための燃料にかゝはるところのものであり、資本主義の進展に伴ふ人口増加率の遞減、新土地および技術的可能性の減少が新投資の機会を次第に涸渇せしめ有效需要を不足ならしめる、といふいわゆる長期沈滞論者の見解が之を代表する。更に第三には資本主義エンジンを中に包む社會的環境的因子にかゝはるところのものがあげられ、資本主義過程がやがてそれ自らに逆らひその機能を障碍する社會心理的態度を生まねばならぬ、といふ論議が即ち之に當る。——さうしてシュンペーター教授自らの採擇する途は、まさしく企業家の新機軸論を楯にとりつゝ、第一、第二の見解を否定し去り、第三のそれを詳細に築きあげてゆくところに存しているやうに思はれる。

最初の二つの見解を却ける教授の行論を辿るにつけ、われわれは教授の推理がいかに年來の新機軸論と堅く結ばれているかに今更ながら驚かざるを得ない。すべてが創造的破壊といふシュンペーター的世界を通じて眺められている其處では、例へば獨占といふやうな現象も全く相異なる光りの下に立現はれねばならぬ。一定の與件の枠内に於いてこそ、獨占は純然たる悪であり、軍配は原子論的完全競争にあがつたかも知れないが、ひとたび資本主義の過程が無風状態にではなく不風の疾風の狀態にあることが理解されるならば、獨占的行動こそかへつて阻止的たるよりもむしろ保護的な條件なのではなからうか。ブレーキがついていればこそ自動車は安んじてより、速く走れるのではなからうか。かくして、完全競争對獨占の功罪の判決は、*cefers paribus* の特定時點についてではなく、過去から變動的未來に連るオリバー・リットンの効果についてこそ下さるべし、となす教授の主張は、すぐれて現代厚生經濟學への一批判たり得るものであらう。

投資機會涸渇説についても同然である。まづ人口増加率が減少したからといつて、有效需要が必ず減退するとはかぎらない。現に他の交代的需要を増加するためにこそ産兒が制限されることすらあり得るのではないか。次に新土地の減少が投資の捌け口を狭陋化するといふことも無條件には肯へぬ論理である。といふのは、地理的フロンティアが必ず經濟的フロンティアを意味するとは言へないからである。最後に優秀な技術が採擇し盡される結果投資が萎縮するといふ論理もまた謂れなきものである。けだし技術的可能性は土地とは異り *uncharted sea* なのであり、残された技術が劣悪だといふ必然性は存在しないからである。さうして決定的なことは、土地といひ技術といひ、それらはすべて發展のための受動的な條件なのであつて、それらを *exploit* する主體こそ企業家である、といふ點である。さて、かゝる議論を通じて余されるところは、いよいよ第三の積極の見解のみとなつた。そのために展開される教

授の重疊たる推理をいま一應ポケット型に縮小するならば、それは概ね次の如きものとなるであらう。

第一に、資本主義の高度化が企業家職能そのものを不用化してゆくことが指摘される。大規模企業の發達はそれに附隨して會社の人事機構を加速度的にメカナイズし、技術的進歩をますます一部専門家のビジネスとなさしめてゆくとともに、他方相次ぐ革新に馴れて新機軸を當然事と考へるに至つた社會的環境は企業家の個性と意思の重要性をいよゝく稀薄ならしめてゆく。嘗つて天才の閃きの中に現れたあの新機軸そのものがいまや平凡なルーティン・ワークと化し、初期の冒險的商業活動のローマンスは急速に萎へてしまふのである。かくして自動化され非人格化された經濟過程に於ける企業家の不用化は、譬へてみれば近代戰の發達とともに劍を揮ひ馬を馳せる機會を失つた昔の將軍の運命にも似るものがあらう。さうしてこの企業家職能の意義喪失こそ、自らの生活の基礎をこの active sector の成果に依存せしめているブルジョワ階級の没落を直接間接に招來するところのものと言はねばならぬのである。

第二に、資本主義の發達はブルジョワ階級がそれなしでは濟まし得ぬところの保護階級を破壊する。といふのは、次のやうなことがらを意味している。資本主義社會は周知のやうに封建社會の諸制度の破壊に始まつたが、しかし中世の領主や騎士は、その mystic glamour の lordly attitude の故に (マシアン・ベーター教授は言つてゐる)、朝臣へ行政吏へ外交官へ政治家へといふ輝かしいメタセルフェーゼを遂げ、資本主義社會に於いてなほその支配的地位を保持することが出来た。それはひとへに支配的地位の維持に不可欠なあの「威嚴」を彼等が具有した事實に依るのである。しかるに企業家に於いては事態はまさに反對となる。彼等は經濟への指導權をもつとはいへ、それは決して彼等をして國民への指導權をもたしめるところのものではない。「株式取引所は聖杯の代用品となるにはあまりにも貧弱である。」^(註3) その故に産業階級は、自らとは相異なる材料から成る保護階級の枠なくして内外の政治を擔當する資格を

有し得ず、國民の指導はおろか、自己の階級的利益の擁護にすら事欠かざるを得ぬのである。それにもかゝらず、資本主義の進展は、或ひはその經濟的プロセスから或ひはその社會心理的影響からこれらの保護階級を排除する。とすれば資本主義は、前資本主義的な機構を破壊しながら常に自らの進歩を阻む障壁のみならず亦自らの崩壊を防ぐ迫りまでも破壊しているのだ、といふのである。

第三には、次のやうな産業階級の活力喪失、ならびにモラルの變容が生ずる。まづ資本主義の過程は不可避免的に中小企業を壓迫するが、教授に於いては、それは競争の没落即資本主義の没落といふ月並な論議の引合ひに出されてゐるのではない。たとひ巨大企業が「天使から賞讃されるほど完全に運営されたとしても」^(註4) それはなほ他の廣汎な社會的歸結を齎さざるを得ない。就中、巨大企業に於ける所有と經營との分解の過程は、財産といふもの、アイデアを根柢から變貌せしめてしまふ。かつての財産の意味した自分の工場、機械、あの視ることが出来、觸れることが出来た生々しい實體から、それは忽然として空虚な一片の株券に轉換する。さうしてかゝる産業財産の蒸發 (Evaporation of Industrial Property) が往時の企業家の戰鬪意欲を殺す力となることは、われわれの理解に易いことである。

のみならず、更にもう一つの財産の蒸發が現れる。資本主義の精神たる合理主義の精神が、單に企業家の費用計算に止まらず、私生活の内部にまで自己を浸潤せしめてゆくとき、人々は漸く家族制度の意義に懷疑の眼を向けはじめ、家庭の快適さとそれが賦課する重荷とを秤量するに至る。父祖の肖像が煖爐を見下すあの廣間のシーンは次第に生彩を失ひ、メカナイズされ合理化された小住宅のタイプが現れるとともに、レストーラン、クラブでの生活が著しく比重を大にし、こゝに屋敷繪畫彫刻等々の消費財産の蒸發 (Evaporation of Consumers' Property) ^(註5) ともいふべき現象が生起するのである。さうして、この徴候が資本主義エンヂンの機能といかなる關係をもつか。家庭こそがブル

シヨワ的利潤追及のばねであつたことを想起すれば、あとは言はずして明らかであらう。自らが刈ると否とを問はず
 將來のために種子を播く資本主義の倫理は、こゝで企業家のモラル・ヴィジョンから永劫に消え失せねばならぬので
 ある……

さてシュンペーター教授が展開する論理は勿論以上にとゞまるものではない。資本主義の要塞が防禦力を弱化する
 とともに醸成される攻撃の氣運、局外者として辛辣な批判のみを生命とし大衆一般の不满に聲を與へるインテリゲン
 チヤの役割、等々が更に黄昏の晝面に一層の仕上げのタッチを添へるところではあらう。しかし、われ／＼はそるそ
 るこの邊で筆を擱かなければならない。いまは只以上の診断についての教授の但書のみを摘記して棹尾を飾ることに
 しよう。

What counts in any attempt at social prognosis is not the Yes or No that sums up the facts and arguments
 which lead up to it but those facts and arguments themselves. They contain all that is scientific in the final
 result. Everything else is not science but prophecy. Analysis, whether economic or other, never yields more
 than a statement about the tendencies present in an observable pattern. And these never tell us what *will*
 happen to the pattern but only what *would* happen if they continued to act as they have been acting in time
 interval covered by our observation and if no other factors intruded. "Inevitability" or "necessity" can never
 mean more than this.

(註一) J. A. Schumpeter, The Instability of Capitalism, Economic Journal, September, 1923, pp. 361-386.

(註二) Schumpeter, Capitalism, socialism and Democracy, 第一節脚註(參照)。

(註三) Schumpeter, op. cit., p. 137.

(註四) Schumpeter, op. cit., p. 140.

(註五) Schumpeter, op. cit., p. 158.

(註六) Schumpeter, op. cit., p. 61.

* * *

あれもこれも、といふ要求を二〇〇字七〇枚の制約条件の下に極大化し得ざるまゝ、處女作から最終の書へと目ま
 ぐるしい遍歴を續けたわれ／＼のシュンペーター・ノートは、われわれはこゝで二應の終止符を打つこととする。

〈校正のとき〉

當然に待望されたシュンペーター教授へのオビチュアリイは、まづ他はさきがけて同ハアバント大學ウシリイ・レオンチヤフ教
 授の捧ぐるところとなつた。こゝに附記して興味ある讀者の閱覽に俟ちたい。

Vassily Leontief, Joseph A. Schumpeter (1883—1950), Econometrica, April, 1950.